

瀬戸内晴美
嵯峨野より



嵯峨野より

一九七七年三月三十一日 第一刷発行
一九七七年九月二十八日 第五刷発行

著者 瀬戸内晴美 発行者 野間省一 発行所

株式会社講談社 東京都文京区音羽二一一

二一二 郵便番号一一二 電話東京(〇三)

九四五一一一一(大代表) 振替東京八一三

九三〇 印刷所 信毎書籍印刷株式会社 製

本所 藤沢製本株式会社

定価 九八〇円



© Setouchi Harumi, 1977 Printed in Japan

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

瀬戸内晴美



講談社



墓のある窓	6
杜鵑 はととぎす 鳴く頃	19
草樹の声	31
沙羅と螢	42
花々の声	55
火の祈り	67
月と曼珠沙華	79
秋冷の中に	91
あがほとけ	103
冬枯れの道	115

切 き に生きる	239						
彼岸のあとさき	227						
あだし野の千燈会	214						
対岸の花火	202						
七夕の誓い	190						
梅子熟す	178						
花狂い	166						
春の客たち	153						
栄華の人	141						
雪の哀しみ	128						

装幀・横尾忠則

嗟
峨
野
よ
り

墓のある窓

昨年末嵯峨の鳥居本とりいもとに引越して以来、三ヵ月たって、ようやく、わが庵の庭が一応形らしくなってきた。

この地は、仏餉田町ぶつしょうでんちょうと名づけられているから、たぶん昔は仏さまにお供えするお米をつくるたんぼであったのだろうと想像する。それより更に昔には、あだし野の地つづきであるから、大方、風葬の地であったのではないだろうか。

京都といってもその頃は、このあたりは都の外であって、淋しい草原の嵯峨野を横ぎり渡り、ようやくにたどりつく山の麓であった。

大昔の京の人々は、身内の者が死ねば、賀茂川を渡って東山の麓の鳥辺山の斎場に、なきがらを焼きにいくか、嵯峨野を越えて、あだし野に棄てに来たのではないだろうか。

ついこの間も、庭造りに毎日通ってくる植木屋が私の書斎の窓の下でお茶休みに話していた。

「お前、まだ、墓掘りしたことないのか」

訊いたのは年かさの人だった。

「うん、おれ、まだしたことない」

少し若い声が答えている。みんな土着の、何代も嵯峨に住みついた人々なのだ。

「そうかなあ。もうお前の頃は土葬はないようになってたかなあ」

「わしの子供の頃までは、まだこのあたりはみな土葬やったなあ」

別の声という。

「そうよ、わしら、みな、墓穴掘らされたもんや、墓穴掘りしてると、よう、いろんなもんが出てきたもんやで」

「どんなもんが出る」

「ほら、骨壺も出るし、水瓶や、鏡やぎょうさん、棺桶に一緒にいれたもんが出よったでえ」

「骸骨は出えへんのか」

「そら、なんぼでも出てきよったわ」

急に春めいてきたすぎとおった陽光の中で、彼等の話は、物見遊山の旅の話でもしているようにのどやかに聞えてくる。

数かぎりもない人の死体がとけて、土にかえっていくさまが、ふと、私の臉の裏をかすめていく。それは醜い情景とか、凄惨な風景としては浮ばず、なぜか、もの優しい、なつかしい情景として私には思い描かれるのだった。

わが庵の南隣りは明るい墓地が開けている。

私は最初、その境界に塀などしたくないと思っていた。地つづきに墓地があるのは、出離して墨染の法衣をまとうている私には、むしろ有難いながめではないかと思った。しかし、実際に暮してみると、不用心だというので、まわりの人々が承知せず、とうとう、塀をめぐらせてしまった。それでも私はその塀の高さを出来るかぎり低くしてもらった。結果的には、塀などしたもの、目かくしには何の役目も果さないものになり、やや高い墓地に立つと、わが庵はすっかり見通しになってしまう。相変らず、わが庵のどの部屋から庭を見ても墓石が累々と立っている様が地つづきに目に入るのである。

その墓地との堺の低い塀の前に、私は檜の木を三十本ばかり植えて林をつくった。わざと落葉樹を選んだのは、あくまで墓地をかくしてしまいたくなかったからである。

日本の墓場というのは、古いものほど雑草が生いしげり、墓石が苔むしたり、卒塔婆が怪しげに倒れかかっていたりして、じめつき陰気なものだが、この墓地は、手入れも悪く雑草が生

いしげっているままに、さえぎるものもない南向きの台地にあるので、終日、陽光が明るくふりそそぎ、爽やかに風が吹きぬけている。

私は仕事の手を休め、墓地を眺めながら、外国で訪ねた様々の墓地を思いだす。モスクワやレニングラードや、キエフやハバロフスクの墓地、私はそこでドストエフスキイや、トルストイや、チェーホフやプーシキンの墓を見た。ハバロフスクでは日本人墓地の草をむしった。それからまた私はパリでもローマでも、アテネでもフィレンツェでもアムステルダムでも、外国の町に行けば必ずその町の墓地を探した。外国の墓地は明るく美しく、墓石は大理石をはじめ、様々な石で美しく彫刻されていて、思いきった意匠がほどこされていた。墓は必ずしも十字架ではなく、故人の胸像など多い。まるで彫刻の野外展に行っているような感じのする墓地さえあった。墓の前が花で飾られているのは日本も同じだが、外国の墓地は墓のまわりに花壇をつくっているものもあった。墓石に故人の写真をはめこんでいるのを見た。

墓地全体が公園のように美しく、径は整然とつき、径のところどころにはベンチが置かれていた。ベンチには終日編物をつづけている老婆もいれば、人が通っても平気で堅く相擁したままの恋人たちもいた。

そんな墓地へ行くと、そこに眠る霊たちの眠りはいかにも安らかでおだやかであろうと想像された。それでも、そんな墓地の小径で目を泣きはらした喪服の若い女に出逢ったことがあった。あれはパリのモンマルトルの墓地でだっただろうか。小柄な女は、初秋の陽ざしにまぶし

いほどにきらめく金髪をなびかせていた。

恋人か、夫の新墓の帰りでもあったのだろうか。

またローマのある墓地では、上品な中年の婦人が、時々、ハンカチを目にあてながら、小さなスコップで墓のまわりに忘れな草の花を一心に植えつけているのを見たことがあった。墓は大理石の像で、七歳くらいの美しい少年がヴァイオリンをひいている姿でほっそりと立っていた。乳白色の石の像は、痛々しいほどやわらかで繊細な表情をしていた。

思わず足音をしのばせなければ悪いような雰囲気があった。私は婦人の背後から、日本流の合掌をして、美しい清らかな天使の冥福を祈った。うつむきこんでいた母親は、ふと、ふりかえって私を見た。祈っている私と視線があうと、もの哀しいやさしい微笑をしてうなずいた。

墓地で逢ったそれらの人々の倅が、もう七、八年もすぎた今でもはつきり臉に残っているのはなぜだろう。

あれは北九州のある半島の突端の岬の小さな町であった。私は旅の途上、喫茶店で地図をひろげているうち、ふと、その半島の端の岬に立って見たくなった。岬は私にいつでも憧れの心をかきたててくる。地の涯というイメージが私に強い誘い方で迫ってくるのであった。

地図で発見したその岬は、聞いたこともない名の小さな町を示していた。そこにたどりつくには、私の坐っている北九州の都会から車や船やバスを乗りついでいかなければならないらしい。地図だと目と鼻の先に見えるのに、そこにたどりつく不便さを喫茶店の女あるじに聞いた

だけで、いっそう私の心はそそのかされてくる。

私は女あるじに、そこへの道順をメモしてもらい、早速、その岬へ向っていった。

大きな湖のような湾に行き当り、船に乗って、湾の向う岸へ渡り、さらにバスに二時間もゆられて、ようやくその岬の町へたどりついたのは、もうたそがれに近かった。町というより、それは鄙びた漁村というのがふさわしかった。

そこへ行きつくまでに通りすぎる村々は祭りで、バスの窓に、のどかな祭ばやしの鉦や太鼓の音が風に送られてきていた。

私のたどりついた町の、二軒しかない宿のひとつに入り、二階の部屋に案内されたとたん、宿の主人があけてくれた窓から、太鼓の音が流れこんできた。

ここもお祭りですか。私は主人にいったとも、ひとりごととも聞える低い声でつぶやき、窓によった。

窓からはなだらかな砂丘が見え、ゆるい弧を描いた渚が白くひろがっていた。

水平線に近づく夕陽の鮮やかさに魅せられて、私はすぐ部屋を出て散歩にいった。

宿は階下の一部で雑貨屋もしていて、主人はその店から赤いビニールの帯のついた新しいサングラスを私のためにおろしてくれた。

道は一筋で、白く乾ききっており、土の中に埋った貝殻がきらきら夕陽に輝いていた。

床屋のあめん棒のような看板をすぎると、家並は崖下に片側につらなり、白い道の一方は渚

につづいてその向うには海が涯しくなくひろがっていた。

風のむきで、祭ばやし、吹きよせられたり、ちぎれたりしてくる。

私はあてもなく、夕陽のあかあかとさす道をひとり歩いていった。まるで無人の島のように家々からは人声も物音もない。ふっと、私はもうこの世にはいないのではないかという奇妙な錯覚が心をよぎる。白い光るものがつうつと目の前の道を横ぎった。やせた猫が渚からあらわれ、暗い家と家の間の露地の中に入ってしまった。

何もなかった渚に、廃船がひきあげられているのが目に映ってくる。砂地に乾した漁網も見えてきた。

いつのまにか片側町の家並がきれ、荒い石垣だけが道の片方につづいてきた。

岬も突端に近づいたのだ。石垣の上は雑草がただけしくのび、その中に白い墓石が累々と並んでいるのが見えてきた。

石垣の上に出る細い径を見つける。そこを上っていくうち、ふいに女の泣き声が聞えてきた。細い泣き声が、たちまち、号泣に変わり、泣き声はあたりはばからぬものとなってほとばしる。

私はためらい、小径の上に立ちつくした。

墓石はすべて海に向って立っていた。これがこのあたりの風習なのか、それらの墓石はすべてシンブルな家の形をしていた。小さな屋根を持つ、祠ほくらに似た墓がよりそいながら、よく見る

とそれぞれの間隔を保って、整然と並んでいるのは、小さな村がそこにあるようにも見える。この里の人々は、故人の霊が死んでもさまよわないよう、宿る屋根の下の家をつくるのだろうか。

墓石はどれもみんな海風にさらされて、白く乾ききっていた。それは白骨でつくられた家々のようにも見えた。

女はそれらの変った墓石の群の片すみで、雑草の中に倒れこむようにして泣いていた。

まだ墓は出来ていず、丈高い卒塔婆が草の中の土饅頭の中に立っていた。

白っぽいブラウスに、緑色のスカートを付けた女は、腕も素足もたくましく、陽によくやけていた。陽やけたまま、それらの皮膚は瑞々しく、女の若さのはちきれそうだった。

女は私の気配にも全く気づかず、ひたすら草にしがみつき、土に涙の頬をこすりつけて号泣しつづけた。

ちぎれた風の運んでくる祭ばやしに彼女の泣き声がまざりあう。

南国らしい幹の太い濃い葉のしげった名もしらぬ樹のかげに、私は身をよせて、彼女の泣きもだえるさまを、つい、見つめていた。

今となつては立ち去る足音がはばかられて、私は身動き出来ないような気になっていた。

女は泣きたいだけ泣くと、子供が泣きつかれて、次第に泣き声を弱めるように、声をひくめ、やがて弱々しい泣きじゃくりをしながら、涙をぬぐった顔から手をはなした。

涙と泥がまざりあって、女の若い頬にこびりついていていた。健康そのものの彼女の顔は、涙で洗われてまるい唇だけがいきいきと濡れたように光っていた。

はげしい慟哭に身を叩きつけるような彼女の悲しみとは無縁なもののように、そのまるい顔にも、ゆたかな頬にも、若さが光りはちぎれるように輝いていた。彼女の気づいていないその生命の輝きが、彼女の今の悲しみをいっそう哀切なものに見せていた。

私は思わず、深いため息をもらしたようだった。

女は、私の気配にはじめて気づき、はっと身がまえた。さとい獣のような身のこなしにふと、なまめきがあった。

私はわれしらず声をかけていた。

「御主人ですか」

女はふたたび黒い瞳に涙をもらいあげてきて、首を横にふった。立ち上ると、ゴーギャンのタヒチの女のような、野性的なたくましさと精悍さがあった。全身から潮の香がたちのぼるような女だった。海女かもしれないと私はふと思った。

女は口の中でいいなすけだったと答え直したようだった。この里の訛りが強いことばは聞きとり難かったが、女は何かに憑かれたように喋りかけてきた。

恋人でも許婚者でもあった男が、漁に出て難破し、三週間前この浜に打ちあげられたのだという。

小さな持船に、父親と乗っていて、父親もろとも溺死したというのだった。

婚礼の支度も、ようやく整ったばかりなのにといい、女はまたしゃくりあげた。

そういうことがよくおこるのかと訊いた私に、女は、目の下の白い墓石を指さして、このほとんどは、そういう人たちの墓だといった。おだやかな死を畳の上で迎えた人たちの墓は、もっと山ぎわのお寺の墓地にあるという。

「もう何代も何代も昔からの漁師の里じゃけん」

と女は吐息のような声をあげた。

私はこれらの墓のひとつひとつの前で、軀を地に叩きつけて号泣している女たちの姿が目に見えてきた。

夕陽が、海に沈む直前の華やきを空いっぱい海いちめんに輝きわたらせていた。夕焼の燃え上るような輝きが、墓地の墓石の群をとっさに赤く染めあげてみせた。

小さな白い家々の屋根から、炎がふきあがったように見えた。

美しい。と、思わず出そうになったことばを私はかろうじて咽喉で押えこんだ。この悲哀に前後も忘れている若い女の前では、不謹慎な思いやりのないことばととられるだろう。

女は幼なじみだった男の思い出をもっと話したそうだったが、ふっと、われにかえったように、白々しい表情になって、私の泊っている宿の名をいい、その宿泊人なのかときいた。

そうだと私が答えると、昨年のもっと寒い時、やはり、ひとり旅の女があつた宿に泊り、あ